

指導救命士養成研修について ～救急救命九州研修所の取組～

救急救命九州研修所
柴崎洋明

はじめに

救急救命士制度が誕生し病院前救護の担い手として大きく飛躍した「平成」から新しい時代へと変わった昨年5月、救急救命九州研修所での「令和」最初の研修として「令和元年度指導救命士養成研修」を実施しました。今回は当研修所の指導救命士養成研修と研修終了後の指導救命士の方々との関わりについてご紹介いたします。

指導救命士養成研修の目的

救急現場という病院前での活動に関する教育については、これまで経験豊富なベテラン救命士が重要な役割を果たしてきましたが、いまや専門分野といえる「病院前救護」と高度化する「救急業務」の質を更に向上させるため、生涯教育体制の中核となる指導救命士の養成カリキュラムが定められました。指導救命士に求められることは、救急救命士を含む救急隊員や通信指令員等の救急業務に携わる全ての消防職員の教育、地域MCとの連携、救急業務の研究や学会での発表など多岐にわたります。当研修所の「指導救命士養成研修」は、指導救命士に必要とされる知識・技術を習得させ、各々が所属する組織や地域の「病院前救護」と「救急業務」を牽引する指導者の養成を目的としており、平成26年度から現在までに1,838名が修了し、指導救命士として活躍しています。

研修の特徴

当研修所の指導救命士養成研修は、国の示した養成カリキュラム（100時限）を基に内容を大幅に上積みしており、救急振興財団が誇る素晴らしい専任教授や各分野の著名な外来講師による講義（119時限）、様々な指導技法を習得するためのシミュレーション実習（113時限）といった大変充実したものとなっています。特徴として、「処置拡大追加講習」と「ビデオ硬性挿管用喉頭鏡を用いた気管内チューブによる気道確保の実施のための講習」の内容（31時限）を包括しており、未認定の研修生であっても、必要な知識と技術、さら

に、その指導法までを安心して習得することができます。そのほか、テロリズムなど不測の事態への救急救護医療である「事態対処医療」や、救急救命東京研修所の専任教授が「心肺機能停止を防ぐための救急救命処置こそが救急業務に肝要である」との考えに基づき、心肺機能停止前の傷病者の病態を科学的・論理的に観察する能力（病態推論）の向上とファシリテーション能力の習得を目的として開発した「POT（Paramedic Orbital Training）」、指導者として訓練想定を作成し安全で効果的な訓練の運営ができるかを一般公開のプレッシャーの中で試される総合シミュレーション演習など貴重な講義や実習を多数取り入れています。また、この研修には全国各地の532消防本部から研修生が来ており、普段は接することのない遠く離れた地域の救急の実情や取組などを研修生同士の「集合知」として情報共有し、所属する組織に持ち帰ることもこの研修の大きな魅力です。

今年度のシミュレーション実習について

当研修所の研修は、常に時勢に即した内容で実施しています。シミュレーション実習計画についても前年度の研修内容をそのままトレースすることはせず、必ずリファインを行います。今年度のシミュレーション実習は「主体性・独創性・拡張性を兼ね備えた指導者の養成」というテーマのもと、次の三つをコンセプトとして計画しましたのでご紹介します。皆さんが研修を企画する際に少しでも役立てていただければ幸いです。

(1) 考えて行動する

「この病態にはどの救急活動が正解ですか？」と絶対の答えを求められることがあります。しかし、当然のことながら、傷病者のバイタルサイン、年齢や病歴といったリスクファクター、さらに、病院前救護特有の「場」の状況といった条件は症例ごとに異なります。たとえ同じ病態の傷病者が10人いたとしても、10人全員に同じ救急活動が奏功するわけではありません。救急救命士がそれぞれの傷病者の状況を勘案して、数あ

る選択肢の中から最も傷病者の利益につながる活動を選ぶのです。そして、指導救命士にもこれと共通する点があります。「上達させるためにはどの指導方法が正解ですか？」と問われても、指導救命士の指導対象は、救急救命士、救急隊員、消防隊員、救助隊員、通信指令員と、個々の知識や技術だけでなく任務までもが違います。その全ての指導対象に対して、紋切り型のマニュアルで指導しても良い結果をもたらすことはありません。まずは指導救命士が一人ひとりの力量を見極め、能力を伸ばすために最も効果的な方法は何かと考えて指導する姿勢を見せることで、自分で考えて行動するという「主体性」を伝えられるのです。

(2) 模倣に始まり模倣に終わる

「模倣に始まり」とは、何か技術を身に付けようとするときに、まずはお手本とする誰かをまねるところから始めることを指します。しかし、繰り返し練習して技術を身に付けたとしても、そのままでは「模倣のまま終わる」となってしまいます。「模倣に終わる」とは、身に付けた技術に自分の考えを加えて独自の技術へと進化させ、それがまた別の誰かのお手本になるということです。今回の研修では、私たち指導教官が基本手技訓練や想定訓練で実際に行っている訓練の組立て方法やフィードバックの方法（手技終了後にまとめてフィードバックする方法や手技を一旦中断させてフィードバックする方法）などをいくつか提示しました。それらを基に、研修生一人ひとりが「独創性」を発揮して、オリジナルの指導方法や訓練想定を作成しました。

(3) 集合知をつくる

作りあげたオリジナルの指導方法や訓練想定をより良いものにするため、教授や教官からフィードバックを受け、研修生同士で建設的な議論を行いました。そうして出来上がったものを集合知、すなわち研修生共通の財産として一つでも多く持ち帰り、それぞれが所属での指導に活用しています。また、ほとんどの研修

生が参加したSNSのグループは研修を終えた現在も継続しています。特異症例の報告や、誰かが疑問に思ったことを投稿すると、それに答えてみんなで議論するなど、情報交換の場として有効に機能しており、集合知として更なる「拡張性」をみせています。

「指導救命士フォローアップ事業」について

当研修所は指導救命士の養成のほかにも、様々な方たちで指導救命士と関わっています。まず、現場で活躍している指導救命士を講師として招聘し、所属本部の教育体制構築などについての講義やシミュレーション実習での訓練を指導してもらっています。指導救命士にとっては指導者としての能力を客観的に評価される良い機会であり、研修生にとっては自分たちの将来像を間近に見る良い機会になっています。そのほかにも、指導救命士を中心とした先進的な取組を行っている消防本部を当研修所の専任教授と指導教官が訪問し、その内容についてのフィードバックを行っています。また、そうした指導救命士の活躍情報を救急振興財団のホームページや機関誌に掲載して全国へ向けて発信しています。

おわりに

救急救命士制度が誕生して今日まで、多くの救急救命処置の範囲拡大が認められてきました。これは、ここまで救急救命士を含む救急隊員の生涯教育や病院前救護体制の構築に携わってこられた方々のご尽力と日々の救急活動によって市民の信頼を積み重ねてこられた先輩方のご功労のおかげであり、同時にこれからの病院前救護体制を担う私たちへの大きな期待の表れでもあります。その期待に応え、より一層の病院前救護体制の発展と救急業務の質の向上のためには、生涯教育の中核となる指導救命士の活躍が欠かせません。私たち研修所スタッフも救急救命九州研修所が指導救命士を含む救急救命士の原点として在り続けるよう常に充実した内容の研修を準備し、新たな研修生の皆さんをお待ちしています。

